

## アジアのキュビズム——境界なき対話

古市保子

——西洋近代との距離を測る

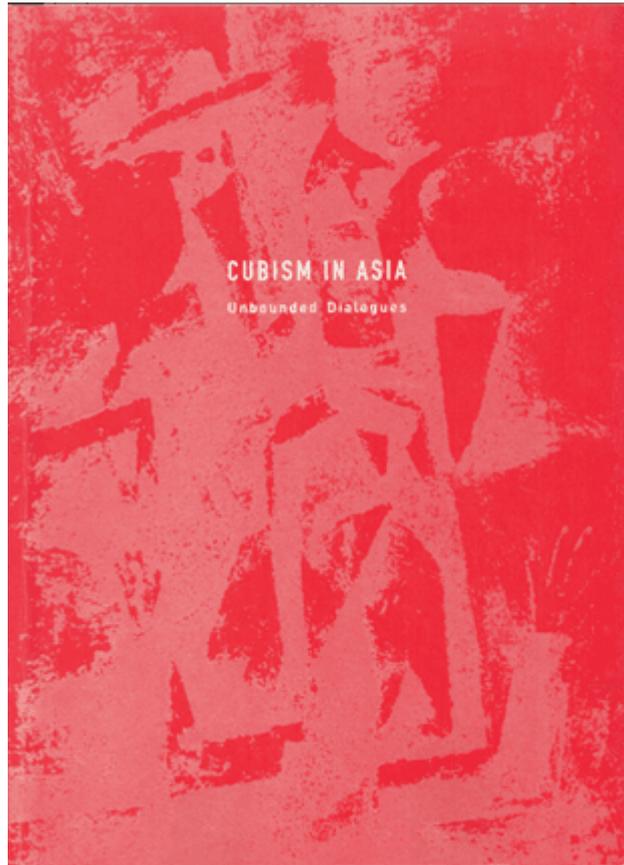
長くなるが、本展の東京展カタログの巻頭の「ごあいさつ」文を引用しよう。

「20世紀初頭のピカソやブラックによって創始されたキュビズムは、…(中略) …その冷徹な合理的精神ゆえに、単なる新しい絵画表現というよりは、近代的な物の見方や考え方を端的に示すモデルとして世界中に伝播していったのです。キュビズムは、世界各地で、ただ受動的に迎えられたわけではありません。それは、西洋生まれの「近代美術」の伝道師的役割を果たすことによって、私たちが、近代的な世界観や芸術観の枠に収まりきれないさまざまな文化的要因に目を向けるきっかけにもなりました。こうしてキュビズムは、アジアの国々においても、それまで各地域育んできた土着的な美術様式・伝統・習俗と衝突や混交を繰り返しながら、それぞれに特色ある「近代美術」を開花させるきっかけとなり、原動力ともなったのです。

(『アジアのキュビズム——境界なき対話』カタログ、2005年、p.004)

この文章を2020年の時点から読むと2005年当時のキュレーターたちの立ち位置を推測することが可能だ。つまり、どんなに誠実に作品に向かい合っていたとしても、キュビズムという西洋近代を表象する概念との距離からアジアの共通性と差異を理解しアジアの近代を考えるという思考法である。2000年代前半の各地で開催される国際シンポジウムでも言及されているように、アジアを意識するがゆえにアジアは常に西洋と共に語られるというポストコロニアルな状況がそこにある。

本企画のアジア巡回版はテーマ別展示を採用し東京開催後、韓国、シンガポールと巡回した。その後2007年には展示構成を地域・国別に再編成しキュビズムの里帰りとして国際交流基金パリ日本文化会館でも開催された。本展はアジア各国を代表する国立美術館が様々な困難を乗り越えてはじめて調査から展覧会実施まで組織したという点において高く評価された。その後、韓国とシンガポールの国立美術館が「アジアのリアリズム」展を引き続き共同企画したのであるが、日本の美術館は参加していない。もしかして、その原因のひとつは、ポストコロニアルな状況にどれだけ鋭敏な感覚を持ちえたかに起因するのではないかと思う。その意味で、我々は歴史・文化的背景から自由ではない。



『アジアのキュビズム』東京展図録（東京：東京国立近代美術館／国際交流基金、2005年）



「アジアのキュビズム」東京展ポスター、2005年  
デザイン：服部一成

## 関連リンク

### アジアのキュビズム展

- 国際交流基金アジア美術アーカイブ  
[https://www.jpf.go.jp/j/publish/asia\\_exhibition\\_history/35\\_05\\_cubism.html](https://www.jpf.go.jp/j/publish/asia_exhibition_history/35_05_cubism.html)
- 東京国立近代美術館サイト <http://archive.momat.go.jp/Honkan/Cubism/index.html>
- 国際シンポジウム2002「流動するアジア：表象とアイデンティティ」  
[https://www.jpf.go.jp/j/publish/asia\\_exhibition\\_history/29\\_02\\_transition.html](https://www.jpf.go.jp/j/publish/asia_exhibition_history/29_02_transition.html)